

SONRISA

そんりさ

vol. 190



2024年4～9月メキシコ滞在記

Casa Tochán を出て米墨国境に向かうベネズエラ人家族

02	2024 年 4～9 月メキシコ滞在記	……佐々木 祐
06	4000 年前にマヤの祖先が築いた水路が発見される	
08	ウカマウ集団全作品上映プロジェクト	
11	ペルー音楽 ラテンアメリカにおけるフェミニズム をめぐる歌の旅(6)	……水口 良樹
13	ラ米百景 メキシコ政府のスペイン国王「忌避」に思う	……伊高 浩昭
14	ムネちゃんのLA 情報拾い読み・斜め読み	……小林 致広

2025 年 2 月 15 日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

勤務先の特別研究制度を利用し、2024 年 4 月末から 9 月末まで 5 ヶ月ほどメキシコに滞在した。メキシコに滞留する移民・難民たちの状況と支援の現状を調査することが主たる目的であったが、実際にはだいぶゆったりとした日々を送ることができた。

その間の出来事などを日記風に綴ってみたい。

4 月猫日

昼過ぎの便でメキシコ・ベニート・フアレス国際空港に到着。迎えに来てくれるはずの友人はもちろんまだ着いておらず、空港内の喫茶で時間を潰すことになったが、日本とほぼ変わらない価格に驚く。

多少落ち着いたとはいえ、ここ数年インフレ基調であることに加え、歴史的な円安（1 ペソ＝約 9 円）も災いし、気分的には 10 年ほど前と比べて物価はほぼ 2 倍かそれ以上。だいぶ遅れてやってきた友人と合流して、バスでセントロにある定宿へ。公共交通機関の運賃は低く抑えられていて安心する。乾季ということもあるが、記録的な暑さが続いているとのこと。

宿について一息つき、夜もだいぶ遅くなってからタコス屋台で夕食。危険だとはわかっているが、各種のサルサをめいっぱいかけてしまう。予想通り、明け方から、下痢。

5 月兎日

映画「Roma」^{注1)}の舞台となったローマ地区の南に位置する、そこそこの住宅街にアパートを借りる。家賃は月 6,800 ペソ（約 6 万円）となかなかのお値段だが、調理器具一式も完備され、さらに週一の清掃込みでもあり、場所も考えればこんなものかもしれない。夜中外をぶらついていても危ない感じはまったくなく（しかし 10 年ほど前、すぐ近くのアパートの一室で 5 人が殺害される事件が起きている）。

ただ、時差ぼけがなかなか治らない。乾燥した空気と暑さ、さらにしつこい下痢にも悩まされ続けているが（毎晩大量に飲んでいるビールのせいもある）、寝込んでばかりもいられないので、シェアサイクルの Ecobici に乗ってメキシコシティをぶらついている。

変速機付きのいい自転車が、スマートフォンの

アプリを登録すれば約 500 ペソで 1 年間利用できる。一回の利用は 45 分までだが、1 日あたりの利用回数には制限はない。市内は基本的に平坦であり、また専用レーンも整備されてきているため、自転車での移動が便利でとても快適。

実際、日常的に自転車を使っている人が急増しているようだし、毎週日曜日にはレフォルマ大通りをはじめとしたいくつかの地域で、自動車・バイクの進入が禁止される「Muévete en Bici（自転車で行こうぜ）」が実施されており、サイクリストや家族連れが楽しそうに市内を駆け抜ける姿を見ることができる。

20 年ほど前までは、まだ年代物のフォルクスワーゲン（Vocho）が、体に悪そうな排ガスを吐き出しながら、我が物顔に走り回っていたものだが、最近では街中を走っている自動車も大部分が新しいものに切り替わっており、サイクリストたちの吸う空気もだいぶ綺麗になっている。

ぼちぼち雨季に入るので、過ごしやすい気候になってきた（最高気温 25 度、最低気温 15 度ぐらい）。

5 月狐日

数日前から、地下鉄 1 号線西端にあるオブセルバトリオ駅（とはいえいつ終わとも知れぬ改装工事のためずっと閉鎖中）に近い移民支援施設 Casa Tochán に通って移民たちと過ごしている。

本来ここは、メキシコ国内での難民・庇護申請を行う成人男性のための支援施設なのだが、ここ数年は事実上、アメリカ合衆国に向かうさまざまな移民たち（場合によっては

女性や未成年者）の滞在拠点として機能している。40 人程度の収容定員を大幅に超え常時 100 人ほどの移民たちが生活しているが、最近ではそれも限界を迎え、新規の受け入れは停止せざるをえない状態となっている。



Casa Tochán 入口。新規受け入れ停止の告知が貼られている

注1：アルフォンソ・クアロン監督・脚本による 2018 年の作品。メキシコ代表作としてアカデミー賞に出品され 3 部門で受賞した。

6月豹日

アンドレス・マヌエル・ロペス・オブラドール (AMLO) 大統領の任期満了に伴い、2日に大統領選挙が実施された。大方の予想通り、AMLOの左派的な改革路線継承を全面に打ち出した国家再生運動 (MORENA) のクラウディア・シェインバウムが、制度的革命党 (PRI) / 国民行動党 (PAN) / 民主革命党 (PRD) が野合した (としか評価できない) 野党連合のソチル・ガルベスに大差をつけて当選。どちらが勝ってもメキシコ史上初の女性大統領が誕生することになったわけだが、どうも日本での報道を見ているとそこにばかり焦点が当たっているように思われてならない。ポイントは女性が大統領になることではなく (それ自体は画期的なことではあるが)、その具体的な政策と力量にあるわけだから、なんだかズレてる。

ちなみに、こっちで付き合いのあるメキシコ人は基本的にみな左翼カリベラルなのだが、そうした人たちにとって AMLO とシェインバウムの評判は総じて芳しくない。確かに「よりまし」であるとしても、それは所詮問題だらけの政治システムの中での話でしかないのだ、と。別キャンペーン^{注2)}でサパティスタたちが主張した、『『上の政治』の拒絶』という言葉の残響がここに聞き取れる。とはいえ、日本の状況よりは「100倍まし」なのだとも思う。個人的には軽く祝杯をあげてもいいような気分なのだが、選挙の日にはアルコールの販売が禁止されているのだった。Casa Tochán に滞在する移民たち、またスタッフたちにとっても、女性大統領誕生はどこか遠い世界の出来事のように見えているようだ。いずれにせよ、施設の扉を叩く移民たちに、最低限の物資と情報を与えるだけで追い返さざるをえない日々は続くのだろうから。

6月猿日

このところ継続して Casa Tochán で「調査」をしているとはいっても、実際にはタバコを吸いながらだらだら適当に喋ったり昼寝したり、というのが実態ではある。以前はここにやってくるのはエルサルバドルやホンジュラスといった中米出身者がほとんどであったが、近年特にハイチとベネズエラ、

またアフリカ・中東諸国や中国からメキシコを経由して合衆国に入ろうとする人々が増えてきている。先日、アフガニスタン人移民からめっちゃくちゃ親しげに (たぶんパシュトゥン語で) 話しかけられて「？」となったのだが、私のことをハザラ人 (アフガニスタンのアジア系エスニックグループ) だと思ったらしい。こないだはスタッフに呼ばれ、中国人移民の通訳をしてほしいと頼まれたのだが、もちろんムリだ。またフランス語あるいはクレオール語しか話せないハイチ人も多く滞在しており、混沌とした多言語・多文化状況がここに現出している。

こうした環境ではスマートフォンの果たす役割はきわめて大きい。言語の問題は翻訳アプリがなんとかしてくれるし (とはいえ、通信量節約のためか使いたがらない者も多い)、不安で先の見えないこうした生活を母国や同国人とのビデオ会話はだいぶ和らげてくれる。そもそもアメリカ合衆国における移民申請は、CBP One と呼ばれるアプリを^{注3)}使ったのみ可能なのだった。

7月豚日

多くの移民たちは、CBP One を通じて知らされるはずの面談日時を待ちながら日々を過ごしている。その通知は3ヶ月以上かかるとも、あるいは3日でいったという噂もあるが、いずれにせよその進展の様子について知る手段はない。さしあたりの生活費を稼ぐため、建設業や清掃業といったアルバイトに出かける者も多いが、半数以上の滞在者はとりあえず Casa Tochán 内部で時間を潰しているようだ。「メキシコは危ないからなるべく外には出たくない」と漏らすハイチ人もいたが、実際に周辺地域で強盗や暴力の被害に遭った者もないわけではない。

そうした滞在者たちを対象に、ここではさまざまな活動が企画されている。イベロアメリカ大学法学部の教員・学生や弁護士を招いての移民関連法制度の説明・相談会は毎月開催されているし、メキシコ国立自治大学医学部スタッフによる医療相談も適宜開催されている。

先日は、イタリアを拠点に移民支援を行うアーティスト集団、ストリートのセックスワーカー支援を行う団体、1996年の「サンアンドレス合意」^{注4)}に

注2) 2005年、旧来の政治とは異なる可能性の創出を目指してサパティスタ民族解放軍 EZLN が呼びかけた取り組み。政党政治そのものの拒否を打ち出した結果、左派に分断が生じたこと、その結果翌年の大統領選で AMLO が PAN 候補に敗れたなどの批判の声が上がった。

注3) 1日あたり1450件の予約が可能だったが、2025年1月20日のトランプ米大統領就任直後に機能は停止され、予定されていた面談もすべてキャンセルされた。

注4) 先住民の文化と権利について政府とサパティスタで交わされた合意。その内容は現在に至るまで実質的に履行されていない。



講演とシルクスクリーン制作ワークショップ



て先住民側の法律顧問を務めたバルバラ・サモラによる講演会とワークショップが開催された。移民支援とは一見なんの関連もなさそうなこの3者だが、それを結びつけているのがサパティスタ民族解放軍による上述の「別のキャンペーン」が拓いたネットワークである。

さまざまな運動体の間に構築されたそうした連関のなかに移民支援運動があるのだということに、当の移民たちはどれほど意識的であるかはわからない。だが、国を超えた移動をある意味で強制された自分たちの存在が、決して孤立した無意味なものではなく、より大きな問題系に接続されているのだとどこかで理解するための貴重なきっかけとして、こうした取り組みはある。

8月鰐日

街をぶらついていると、あちこちにある紫色のスローガンやモニュメントが目に入る。2月15日の「メキシコ女性の日」や、3月8日の「国際女性デー」には、メキシコシティを含めた全国各地で女性たちを主体とするさまざまなイベントやデモが行われる。女性に対する暴力や殺人を糾弾し、尊厳ある生を求めるこうした取り組みの過程で、フェミニズム運動のシンボルカラーである紫が街中に刻み込まれているのだ。

時にはその苛烈さが批判されもするこうした取り組みを行わなくてはいけないほどに、メキシコ女性のおかれた状況は切迫しているわけだが、一方でそうした行為を受け止めようとする態度が社会にあることも事実であることを、こうした紫色のメッセージたちは示している（もちろん、粘り強いフェミニズム運動が作り出した「力」がその存在を担保していることは言うまでもないが）。

そういえば、レフォルマ大通りにあったコロンブス像は2020年に撤去されたのだったが、翌年その跡地に忍び込んだフェミニストたちが紫色の「戦う女性の像」を設置してしまったのだったつけ。いろいろあった末、「戦う女性」の像の存続を決定した



国立芸術院前、女性殺人(Feminicidio)を糾弾する反-モニュメント。「メキシコでは毎日9人の女性が殺されている」



レフォルマ大通り、移民72人殺害事件を告発する反-モニュメント。「移民することは人権だ」

のが、当時メキシコ市長だったシェインバウムだったはず。

こういった「反-モニュメント (antimonumento)」はほかにも市内のあちこちに設置されている。2014年にゲレロ州で起きたアヨツィナパ師範学校生徒43人の強制失踪事件、65人の犠牲者を出した2006年コアウイラ州の鉱山事故、2010年にタマウリパス州で起こった中米移民72人の集団殺害事件など、国家や企業、犯罪組織によって奪われた命を鎮魂するとともに、その真相究明と責任追及を静かに、だが力強く訴えかけるこうした像の数々は、こんにちのメキシコシティの風景を構成する欠かせない要素となっている。

8月蛙日

街を歩いていてこのところやけに目につくのが、聖衣を纏った骸骨の像「死の聖母 (Santa Muerte)」の祠だ。麻薬カルテルや犯罪組織と密接な関係があるなどという噂もあるが、私が目にしたものについてはどうもそんな印象は受けない。実際、かなり治安の良い私のアパートのすぐ裏手にも祠が作られているし、Casa Tochánの近くやふとした街角などに、ごくカジュアルな感じで鎮座しているのだ。

カトリック教会はこの信仰を悪魔崇拝とみなして否定してはいるものの、実際の祠のなかを覗いてみると、紙幣や生花、

また家族の記念写真などが飾られ、そうしたおどろおどろしい雰囲気などは感じられない。「死者の日」を引き合いに出すまでもなく、メキシコ社会にとって「死」が身近な存在であることを改めて感じている。



Casa Tochán 近くのサンタ・ムエルテ祠

8月蝶日

7月後半からだいぶ円が回復(1ペソ=8円弱)してきたが、まだまだ物価が高く感じられるため、調査に出ない日の食事は基本的に自炊か市場の食堂でとるようにしている。アパート近くの市場では、定食 *Comida corrida* が 60 ペソで食べられる。前菜(サラダかパスタ)、スープ(パスタか米が入れる)、メイン、デザートにフルーツジュース、そしてもちろん焼きたてのトルティージャからなる定食はまあ美味しく量も十分なのだが、毎日となるとやや飽きる(炭水化物が多すぎる)。

そういう時は、多少奮発して目先の変わったものを食べるべきだろう。あまりイメージはないかもしれないが、メキシコシティでは各国の料理を楽しむことができる。イタリアンやフレンチ、スペイン料理や日本料理(居酒屋とラーメン屋も増えてきている)はもちろんのこと、近年すっかりコリアンタウン化したかつての繁華街ソナ・ロサでは本格的な韓国料理を食べることができるし、タイやベトナムといったアジア料理の店も最近ちらほら見かけるようになった。キューバやエルサルバドル、コロンビ

アの名を冠したレストランもあるようだ。また、変わったところではトルコやレバノンといった中東料理の店も増えてきている。

ただまあ、こうした店に行くと、どこでも軽く 250 ペソは飛んでしまうので、そうそう行けるものでもないのだけれど。



トルコ料理店にて。
Adana Kebap

日本料理といえば、最近繋がりができた日系人コミュニティの拠点の一つ「中央学園」で販売している弁当が面白い。日本から移住してきた若い夫婦が「発明」した巻き寿司の具といえば、揚げた甘辛いタレを絡めたバナナだったり、どこかメキシコの香りのするひき肉炒めだったり、チーズだったりするのだが、さらにそれに辛いサルサ(*Salsa Macha*)をつけて食べるのがおすすめとのこと。実際にそうして食べてみると、確かに美味しく、確実に日本とメキシコの両方の味が喧嘩することなく共存していることに驚く。

食事に関してはあまり冒険しない傾向のあるメキシコ人だが、これはずいぶんと好評とのこと、確かに近所の住民がひっきりなしに顔を出しては買ってゆく。1パック 100 ペソと、この地域の物価感覚からしても決して安くはないはずなのだが。新

しい食文化の誕生と適応の一つの局面を見ているのかもしれない。

9月犬日

16日は独立記念日。前夜は日墨協会の方の家に勝手にお邪魔し、ご馳走とメスカルをいただきながら、AMLOの最後の「エル・グリート」^{注5)}を待つ。11時に現れた大統領の口から発せられた最初の言葉は、「女性の、そして男性のメキシコ人よ、独立万歳！(*Mexicanas y mexicanos; ¡Viva la Independencia!*)」であった。22回の「万歳」と4回の「死を(*Muera*)」で綴られたグリートは、これまでの大統領のものとはだいぶ趣が異なっていた。独立の英雄たちを讃えた後には、「女性の、そして男性の無名の英雄たち、万歳！」。「汚職に死を！強欲に死を！レイシズムに死を！差別に死を！そして、友愛に万歳！」「われわれの移民のきょうだいたちに万歳！先住民族に万歳！」「女性の、そして男性のすべてのメキシコ人、万歳！第4次変革(*Cuarta Transformación*)、万歳！メキシコ万歳！」。

最後のほうに自分の目玉政策である第4次変革を入れてくるあたりはどうかと思わなくもなかったが、熱気のこもった感動的なグリートだったと言えるのではないかと。ただ、メキシコに滞留する移民たちやその支援者、あるいはサパティスタをはじめとする先住民自身が、これを聞いてどう思ったのかはわからないが(もちろん、グリートにおける「移民」とは、主としてアメリカ合衆国に在住するメキシコ人移民のことを意味している)。

9月猫日

本とメスカルを詰め込んだバカ重い荷物を引きずりながら深夜の空港へ。5ヶ月間ここで生活してきて退屈したことはなかったし、正直帰りたくない。というか、涼しいメキシコシティから灼熱の日本に戻ることを考えただけで、ここ数日憂鬱でさえあった。でもまあ、いつも、メキシコを出る時はこんな気分になるので、もう慣れっこになっていると言えは言える。明日からまたメキシコに戻る日のことを心に抱きながら、日本での生活をやりすごすことになるのだろう。

追記：帰国してすでに4ヶ月が過ぎましたが、まだ全然日本の生活に馴染めずにいます。

注5) 独立の発端となった1810年のミゲル・イダルゴ神父の叫びを再現したもの。メキシコシティでは大統領宮殿前広場(ソカロ)に詰めかけた群衆を前にバルコニーから大統領がグリートを行う。

4000 年前にマヤの祖先が築いた水路が発見される

2024 年 11 月のサイエンス・アドバンス誌に発表された研究によると、中米のベリーズで、およそ 4,000 年前、マヤ以前の狩猟採集民が魚を獲得するために水路と池をつなげたシステムを構築していたという。そのシステムでは、毎年 1 万 5 千人を養うのに十分な量の魚介類を捕獲できた可能性があるという。

「このように早い時期に、このような大規模な地形の改変がみられるのは本当に興味ぶかい。人々はこの時期すでに何かを建設していたことがわかる」と、ピッツバーグ大学の考古学者クレア・エバート氏は語る。この魚捕りシステムはベリーズに位置し、広さは約 41.4Km²に及び、中米で知られているこの種の魚捕りシステムとしては最古のものである。

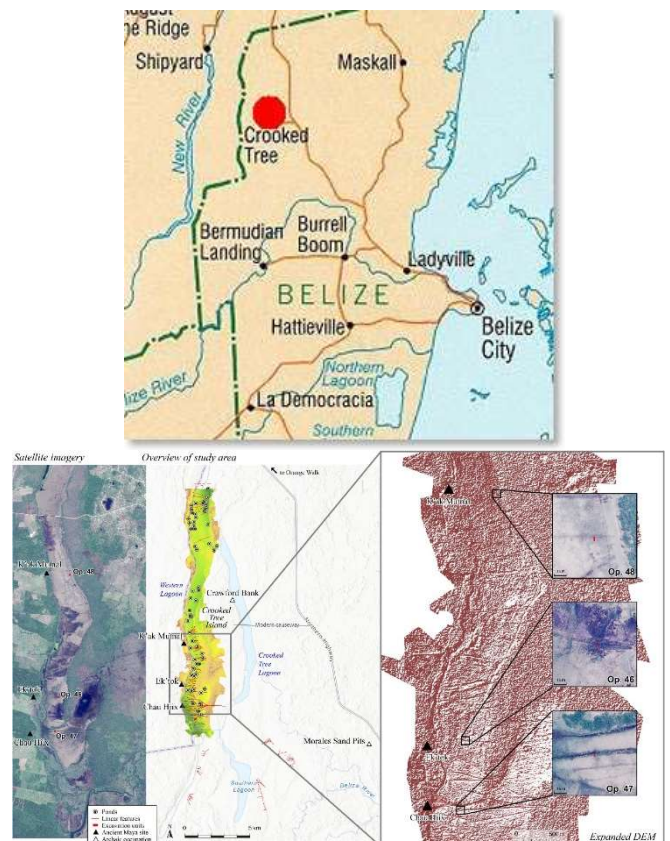
2017 年、研究者たちはドローンとグーグルアースの画像を使用して、ベリーズ北部のクルックド・ツリー野生生物保護区にあるこのシステムを調査した。サイエンス・ニュースの報告によると、研究者たちは 167 の掘削された水路と 60 近くの池を発見した。

「それらは浅い水路で、上空から見るのが最も適していた。私たちはまずグーグルアースで、次に衛星リモートセンシングデータを使って、水路を特定し、さらにドローンを使用した低空からの映像撮影で水路の深さのデジタルモデルを構築することができた」と、ハンプシャー大学の人類学者エレノア・ハリソン・バック氏は話した。

「これらの水路のうち約 11 個は、以前の調査において特定されていた。しかし、それらはマヤ帝国時代（古典期 250~950 年）の農業用灌漑システムと分類されていた」

2019 年、この地域で干ばつが発生したことによって、ふだんは水浸しになっている水路を掘削することが可能になった。

サイエンス・アドバンス誌に掲載されたエレノア・ハリソン・バック氏とバーモント大学の人類学者マリエカ・ブラウワー・バーグ氏による共同研究では、さらに多くの水路が見つかっただけでなく、発掘し採取したサンプルを放射性炭素年代測定にかけて、その年代も確認された。その結果、この捕



遺構のあったクルックド・ツリー野生生物保護区



ジグザクの曲がった水路がグーグルアース画像とドローン映像で確認

獲施設は、マヤ文明が勃興する前の紀元前 2,200~1,900 年の間に建設されたメソアメリカで最古のものであることが判明した。

「それらがそれほど古い時代のものだったとは知らなかった。マヤ人が建設したものと想定していたので、これは素晴らしい発見だった。約 4,000 年前の狩猟採集民がこのような規模の集団的な巨大な構造物製作に従事していたことは、これまで中米では発見も記録もされたことがなかった」と、ハリソン・バック氏は述べる。

水路や周囲の湿地では、漁労に使われたと思われる尖ったモリ先、水路を掘るために使われたと思



干上がった湿原に現れた水生動物の捕獲施設

われるスキも発見された。ブラウワー・バーク氏によると、同様の遺物が古期（archaic period 紀元前 8,000~2,000 年）に関連するほかの発掘調査でも発見されているという。これらの道具は、明確な証拠ではないが、古期の特定の期間にこのような活動があったことを示す非常に良い指標であるという。

このシステムは大規模な干ばつが発生していた時期に建設されたものと思われる。かつては永久的（通年）湿地だった場所は、毎年春と夏に洪水の水が引くと、季節的な湿地帯となっていた。湿地が水没している時期には、魚やその他の水生生物はジグザグの水路を自由に泳ぐことができた。しかしその後、水が引いてしまうと、魚や水生生物は仕掛け罠となった池に閉じ込められ、人々は簡単にモリで突き刺して捕ることができただろう。

このシステムを構築するには、地域に住んでいたコミュニティが「水文学」（水の状態や変化を水の循環の観点から研究する学問。水資源開発保全に不可欠な知識）について多くのことを理解しておく必要がある。それにはおそらく何百年にわたっての観察が必要だったに違いない。

「かつては永続的な湿地だった場所が、季節的な湿地に変わったことを彼らが理解していた可能性は大いにある」と、ハリソン・バック氏は語る。

また、すべての池が同時に作られたかどうかについてはまだ調査中としている。

「それらの池はお互いにつながっている。つまり、それは巨大な湿地の中を水がジグザグに流れるようなものである。このようなものを建設するには、様々なグループが協力する必要があっただろう」と、彼女は続けた。

考古学者の中には、干ばつのせいで狩猟採集民が

トウモロコシなどの栽培植物にますます依存するようになったと示唆する人もいる。

しかし、研究者たちは当該地区の水路でトウモロコシの花粉を発見することはなかった。トウモロコシなどの栽培植物ではなく、魚やアマランサス（ヒユ科の穀物）など干ばつに強い植物にますます依存するようになったと、研究者たちは考えている。

「メソアメリカ全般では、農業生産が文明の原動力とみなされる傾向がある。しかしこの研究は農業だけでなく水生生物の大量採取の可能性もあったことを示す」と、ハリソン・バック氏は語る。

マヤ以前の狩猟採集民がこのシステムを構築していた可能性があり、約 3,000 年前、その子孫であるマヤ人がこのシステムを使うようになった。彼らは魚の捕獲や社交の場を求め、毎年この地に戻っていた可能性があり、それが最終的により永続的な居住地へと変化していったと考えられる。

豊富な魚介類は、定住化を進ませ、増加していく人口を支えていたと思われる。そのような「土地への集中的な投資」が、複雑なマヤ文明の誕生を助けた可能性がある、ブラウワー・バーク氏は声明で述べている。

「彼らがこれほど長い間にわたって漁業を続けることができたのは、彼らの柔軟で革新的な技術の賜物である。それは彼らが水生資源を維持しなければならないことを認識していたからでもある。そのことは今回の調査ではあまり強調されていなかったが、疑いなく、私たち全員が受け取るべきメッセージである」

現在、これらの水路や池は堆積物でほとんど埋まっている。しかし、4,000 年経った今でも、それらは本来の目的通りに機能している。「地元の人たちによると、乾季には今でも池に魚が集まっている」と、研究者たちは記している。

この記事は、スミソニアンマガジンの記事を中心に BBC の記事などを加え、編集・作成しました（大西裕子）

出典：

<https://www.smithsonianmag.com/smartnews/archaeologists-discover-ancient-canals-used-to-trap-fish-in-belize-4000-years-ago-180985548/>

<https://www.bbc.com/mundo/articles/cdd6zm6ld5o>

<https://www.science.org/doi/10.1126/sciadv.adq1444>

ウカマウ集団全作品上映プロジェクト

太田昌国さんの了承を得て、クラウドファンディングのサイトにある案内（<https://motion-gallery.net/projects/ukamau>）を短くまとめて紹介します。レコムも賛同しています。どうぞみなさんご協力をお願いいたします。（編集部）

【1973 年 南米放浪中にウカマウと出会う】

この企画を進めているメンバーのひとり、太田昌国です。編集者兼評論家です。映画には素人なのに、ボリビア映画の自主上映と共同制作にハマッてしまったお話です。1960年代から1970年代にかけてのラテンアメリカにおける政治的・社会的・文化的な胎動に刺激を受けて、現地を見なければと思い詰めて出かけたのが1973年半ば。連れ合いの唐澤秀子と一緒にでした。

現地の人びととの縁に恵まれ、仕事にも就けたりして、振り返って見れば、30歳前後の3年半の月日をメキシコからアルゼンチン、チリにまで至る大陸部の過半の地域で過ごしました。バックパッカーの先駆けだったと思います。

さて、エクアドルの首都キトに着いて間もなく、ある映画との決定的な出会いが生まれたのです。散歩中に、壁に貼られたポスターが気になって近寄ってみたら、【『コンドルの血』、ボリビア・ウカマウ集団 1969 年製作、ホルヘ・サンヒネス監督】とあります。先住民の青年の顔がポスターの真ん中にある、それだけでも大きな驚き。社会の周縁部に押し込められている先住民が映画の宣伝ポスターの前面に出ることなどあり得ない時代だったからです。映画を観ました。

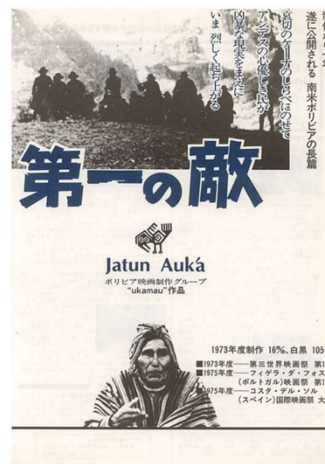
米国が「低開発」のアンデス地域に派遣した「平和部隊」の医療チームが、迫りくる人口爆発と食糧危機を防ぐために、産児制限をしないアンデス先住民の女性たちに、同意を得ないままに不妊手術を施している実態を描いた、優れた映画でした。日本を出る前、ボリビアとペルーの政府が「平和部隊」を追放したとの記事を読んでいました。実話に基づいた映画だったのです。見慣れた日本映画とも欧米の映画とも異質な、独特の雰囲気を感じて、とても心に残りました。

たまたま製作者たちがキトにいて、すぐ会えました。監督のホルヘ・サンヒネスと、プロデューサーのベアトリス・パラシオスです。映画の感想を

伝え、自分たちの旅のことを語り、先方も自分たちの映画のこと、監督のホルヘは白人で、ベアトリスはメスティーサ（混血）ですが、ボリビアがとんでもない人種差別の社会であること、自分たちはそんな社会のあり方を変えるために映画を作っていること、その際、欧米中心主義の世界観・歴史観を離れて先住民社会に生き永らえている自然哲学や人生観・世界の捉え方に深く学んでいることなどを語ったのです。

【1980 年『第一の敵』から自主上映を開始】

日本では商業公開を計画しましたが、1980年当時はまだミニシアターもなく、小国の無名の監督の作品を公開する壁はとて高く、自主上映の道しかありませんでした。自力での字幕翻訳、完成試写会、マスコミへの働きかけ、公開劇場探しなどー映画界に疎いながら、なんとか手を尽くしました。



『第一の敵』は、地主に痛めつけられる先住民貧農と都市からやってきたゲリラとの共同闘争の物語。しかもボリビア発の作品だと知れば、誰もが、つい13年前（1967年）にボリビアでのゲリラ闘争で死んだチェ・ゲバラを思い起こす時代。

東京上映は2週連続で金・土に計6回上映し、入場者2000人。信じられないほど多くの人びとが詰めかけたのです。

【1989 年『地下の民』を共同製作】

ウカマウに送る入場収入も増え続け、ウカマウからは次回作を共同製作しないかとの呼びかけがあったのは1985年。実現には時間がかかりましたが、1989年『地下の民』完成、同年のサン・セバスティアン国際映画祭ではグランプリを獲得しました。

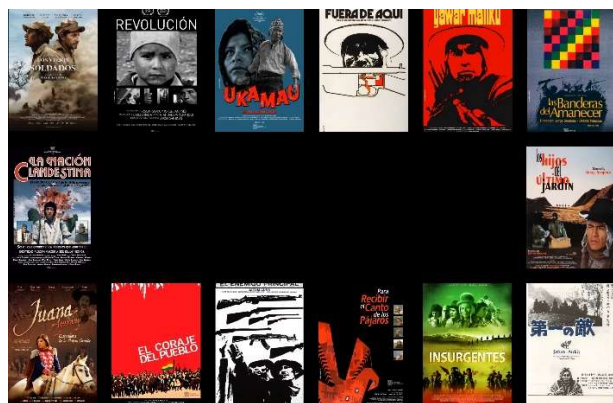
ウカマウ集団の作品をすべて上映できるのは、世界的にみてもとても貴重なことです。それは、

ボリビアの製作集団と日本の私たちとの間には、40 年有余に及ぶ協働関係が成立しているからです。上映収入の確実な還元、ウカマウ映画に関係する冊子、理論書、シナリオ集、2003 年に早逝したベアトリス遺稿集の刊行、ウカマウ集団が 2000 年ラパス市に「アンデス映画学院」を設立した際には彼らが希望した日本メーカーの映写機材をスタッフが届けて贈呈するなど、多岐にわたる協力関係を築いてきました。それには、何よりも、劇場に来られた観客の皆さんの熱い支援・協力が支えでした。

日本にも世界にも通底するアンデス発の作品群

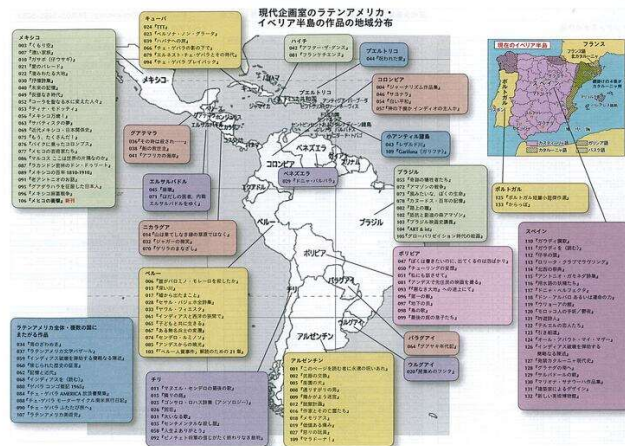
ウカマウ映画は一貫して、民族・植民地問題、人種差別、貧困と格差、そして上下の権力関係のない水平的な社会の在り方などをテーマに映画を作ってきました。アンデスが地元なので、歴史的な背景はそこにあります。しかし、ラテンアメリカ地域は、コロンブスの大航海と「地理上の発見」の時代を契機に、世界史上初めてヨーロッパ列強によって植民地化されたために、その歴史を描くことは日本にも世界にも通底するものをもっているのです。先ごろも、日本の人気バンドが製作した「コロンブス」というミュージック・ビデオの人種差別的な内容が問題となり、公開が停止されました。エンターテインメントの業界も、歴史や世界をどう正確に把握して表現するかが問われる時代なのです。

世界は、いま、問題だらけです。深刻化するばかりの民族間の抗争、今なお根絶できていない人種差別、内向きに自民族・自国の枠に閉じこもり異民族・異文化への窓を閉ざす傾向—ウカマウの映画は、私たちがこれらの問題について考え、何事かをなそうとする時に、ヒントと力を与えてくれます。



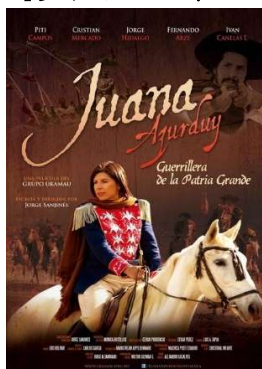
上映予定の全 14 作品

「シネマテーク・インディアス」の太田・唐澤は、上映運動を始めて間もなく、出版社・現代企画室にも関わり、30 数年間で、150 冊以上のラテンアメリカ並びにイベリア半島関係書の刊行にも携わってきました。アンデス地域に関連する書物もたくさんあります。刊行書目を国（地域）ごとに明示した地図をここに掲げておきます。



初公開 2 作品の解説

『女性ゲリラ、フアナの闘い—ボリビア独立秘史』



原題: Guerrillera de la Patria

Grande, Juana Azurduy

2016 年、103 分

製作:ウカマウ集団

監督:ホルヘ・サンヒネス

音楽:セルヒオ・ブルデンシオ

出演:

メルセデス・ピティ・カンボス

クリスティアン・メルカード

フェルナンド・アルセ

フアナ・アスルドゥイはスペイン植民地支配からの解放闘争を担った実在の女性(1780~1862 年)。ラテンアメリカ諸国は、今から 200 年前の 19 世紀前半にはほぼ今あるような国家の形で独立を遂げた。ボリビア独立は 1825 年だから、今年は「独立 200 周年」。因みに、現メキシコにあったアステカは 1521 年に、現ペルー・ボリビアのインカは 1532 年にスペイン人に征服された。だから現代から見ると、コロンブスの大航海と植民地化から 500 年、植民地支配がほぼ 300 年続き、独立してから 200 年というのが、大まかな時間の流れだ。

映画は、1825 年、ボリビアのチュキサカ(現スクレ)にあるフアナ・アスルドゥイの質素な住まいを、シモン・ボリーバルとアントニオ・ホセ・デ・スクレが訪ねるところから始まる。ふたりはともベネ

ズエラの出身だが、南米大陸北部の植民地解放闘争を率いて「解放者」と呼ばれるほどの、そしてボリビアの国名はボリーバルから採られ、スクレは同国の初代大統領を務めるほどにボリビアに縁深い人物だ。

夫は独立闘争の過程で斃れ、4人の子どもを赤痢やマラリアで死なせて、ひとり極貧の裡に暮らすファナの口からは、16年間に渡ったスペイン植民地主義者に対する激しい戦いの歴史、その過程での思いもかけぬ出来事、そして彼女独自の経験などが溢れんばかりに語られてゆく。その語りに基づいて、ファナの足跡が辿られてゆく。

ホルヘ・サンヒネス監督は「ファナは私の中で常に何かをかき立ててくれた人物。19世紀という時代の植民地主義者や宗教者の偏見と闘い、女性の、人間の、母親の権利獲得のためにゲリラ兵士となった。多くの女性たちに、とりわけ観てほしい」と語っている。（解説：太田昌国）

『30年後 一ふたりのボリビア兵』



原題：Los Viejos Soldados

2022年、110分

製作：ウカマウ集団

監督：ホルヘ・サンヒネス

音楽：セルヒオ・プルデンシオ

出演：

クリスティアン・メルカード

ロベルト・チョケワンカ

ボリビア現代史の重要な事件・チャコ戦争（隣国パラグアイとの間で1932年から1935年にかけて戦われた）で、同じボリビア軍に属していた白人で裕福な家庭出身のギレルモと、アイマラで貧農のセバスティアンが会う。

ギレルモが、負傷したセバスティアンを死の縁から救ったこともあって、ふたりの間には友情が育まれる。ギレルモは、あからさまに人種差別者として振る舞う上官に反抗して、軍事裁判に付され死刑判決を受ける。ギレルモは兵営から脱走を図り、セバスティアンもそれに同行して、二人は奥深いチャコ地方の中を彷徨い歩く。食べ物はなく、水もなく、瀕死の逃避行だ。

ようやくにしてある村に行き着いたのだが、二人はいつか必ず再会することを約束し、お互いに真逆の方向の道を辿ってゆく。そして…。

（解説：太田昌国）

協力をお願い

今回、皆さんにご協力をお願いしたいのは製作資金ではありません。日本から毎年送金している上映収入が次回作の製作資金になっています。今回のお願いは、日本国内で全作品上映を行うに当たっての諸経費、とりわけ「上映宣伝費」です。皆様からご支援いただいた資金は以下で活用させていただきます。

新作2作品の日本語字幕作成とマスコミ試写会場費、

特集上映予告編作成とチラシ・ホームページ・パンフレット作成、特集上映時のトークショー経費

プロジェクトスケジュール

3月 新作2作品日本語字幕版完成、新作2作品マスコミ試写実施、特集上映予告編公開、特集上映チラシ完成～配布

4月26日～K's Cinema(新宿)にて全日上映2週間＋2週間モーニング上映開催、K's Cinemaでの上映期間中にトークショーを開催予定

以後、2025年内に順次全国での上映予定（交渉中）

＊東京以外の上映は上映作品が全作品ではない場合もあります

最後に

アンデス先住民に根ざしたウカマウの映画の自主上映・共同製作が40年以上も続いてきたことは、私たち自身にとっても驚きです。遠い世界の歴史と文化が、どうして、こんなにもこの社会の観客に受け入れられたのか。それを可能にしたのが映画の魅力です。2時間、スクリーンに見入れれば、いままで知らなかった新しい世界に出会えるのです。

40年前の昔、初見のウカマウ映画に驚いた人は再見の機会を、まだ出会えていない若い人びとは初見の機会を、一緒につくりませんか。

2025年4月、東京・新宿K's Cinemaを皮切りに、映画と書物を通じて「新世界」が登場します。ぜひ、ご協力をお願いいたします。

公式ホームページ

<https://www.jca.apc.org/gendai/ukamau/>

ラテンアメリカにおけるフェミニズムをめぐる歌の旅(6)

3月末に中南米マガジン社から昨年8月のシンポジウムに資料とコラムを増補したブックレット『日本から考えるラテンアメリカとフェミニズム』を刊行予定で、現在そのために必死に作業をしている。その中でラテンアメリカのフェミニズム歌謡についても、見開き資料とその完全版である web 資料ページを現在作っている。

こうして改めて各国のさまざまな歌の実践をリスト化して眺めていると、本当にそれぞれの国や地域で、問題が共有され、それぞれのポジションから歴史や状況に応じて生みだされてきた切実な声があったのだと改めて痛感する。

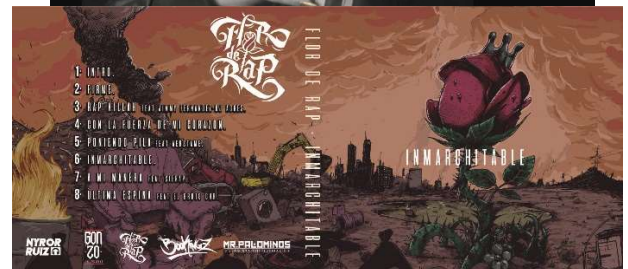
執筆仲間との協力もあり、非スペイン語圏カリブの情報なども教えていただけたりとすると、さらにそのイメージは広がる。

さらには『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 2 越境する社会運動』という講座本でも、アルゼンチンのニ・ウナ・メノス（フェミサイドに対してもうこれ以上一人も死なせないと SNS やストリートで声を上げた 2015 年に始まる運動）やトルコの議会でチリのラステシスのパフォーマンス「お前の行く先にレイプ魔がいる」が行われたことなども書かれているという情報も集まってきて、グローバル時代の運動のインパクトは、バックラッシュがあってもこれほど遠くまで広がっていくのだと目を見開かされる。

それでは第6回は何を書こうか、と思って、このリストを作る中でもっとも心に響いたチリのラッパーの話から始めようと思う。

彼女、フロール・デ・ラップという名前で活動しているラッパーは、チリの首都サンティアゴ近くのいわゆるスラムとみなされる地区で育った。貧困の中、身の回りにはケンカや窃盗、DV、性暴力、売春、麻薬などさまざまな暴力が満ちあふれていた。彼女の人生を大きく変えるきっかけになった一つは、父が家の前で焼身自殺をはかったことだったという。

そうした経験をなぞるかのように創られた「決してつぶされない Inmarchitable」という曲では、その絶望、貧困下に生まれ、暴力の中で家にも外にも居場所もないまま育ち、望まずしてシングルマザーになることになった女性の半生を描き出していく。



フロール・デ・ラップの「決してつぶされない Inmarchitable」

そして生きていく中での絶望と孤独は、子どもを持つことで、別の生き方へといやおうなく強い女としてあることを余儀なくさせていく。

この曲のクライマックスで、フロール・デ・ラップが叫ぶように繰り返す「私たちは下層からきた。だから上を目指すのだ」という言葉の切実さが、私の胸に大きく響いた曲であった。

音楽を単なる消費として聞き流すことを許さない。もしこれを単なる「お話」として聞き流す奴がいるとしたら、それは私たちのこの人生の犠牲の上に社会が、世界が成り立っているこの状況の中で、お前ら一人一人が、この全方位から降り注ぐ理不尽な暴力を許し、加担しているということになるのだ、という叫びが、彼女の言外の声として私の脳内にこだまする。

貧困の中、社会の外側に生を受けた女性、二重に差別される女性という存在の解放を、聴く者に、おまえはそれでどうなのだ？ とつきつける曲のように思えるのだ。そして、改めてこうした絶望の重なりの中から、ニ・ウナ・メノスの運動、もう一人たりとも殺させるものか！という運動が立ち上がってきたのだろうということを改めて感じる。

メキシコ国境の町の詩人（彼女、スサナ・チェベスも殺された）の詩から採られた一節を武器にアルゼンチンから始まったこの運動は、リプロダクティ



フェミギャングスタ/Femi



メルカバーと「勇敢な女たち Mujeres Valientes」でコラボ

ブライツを求める緑のバンダナとともにアルゼンチンからラテンアメリカ全土へと広がっていった。

今回の後半は、アルゼンチンを中心にニ・ウナ・メノスと緑のバンダナをめぐる曲を紹介していきたい。

FEMI、もしくはフェミギャングスタの名前で活動しているアグネス・シモンは、積極的にこの運動に歌で連帯を表明してきたシンガーソングライターだ。ロックとラップをベースに歌われる彼女は、2018年の「私は行く Voy」で有名となった。

女性にとって中世と変わらない性差別と性暴力が満ちる現代に、自らの人生の主人公となることで、緑のハンカチとともにその抑圧に NO を突きつけていく。その闘争に身を投じるのは自分一人ではない。沢山の仲間たち、緑の波がラテンアメリカをおおい、女性とトランスジェンダーの解放につながる道を行くのだ、と宣言する。

彼女は言う。「フェミニズムは自由であり、革命とは気づくことである」そうやって、社会の根幹を、フェミニズムの実現は揺るがす革命たる力を持っているのだと。その道を私は行くのだと宣言する。同じ2018年、彼女はメルカバーとも「勇敢な女たち Mujeres Valientes」でコラボした。

こうした運動に対抗する「保守派」による反動の曲も当然作られている。2020年に発表されたナイル・ガルシアの「私は緑のハンカチを解放する Solta el pañuelo verde」もそのひとつだ。この曲は女性解



ナイル・ガルシア「私は緑のハンカチを解放する Solta el pañuelo verde」

放闘争、とくにリプロダクティブライツによる中絶合法化に対して、もしそれが合法であったら私はここにいなかったと、そしてキリスト教の教えに従い、中絶は許されるべきではないと歌う。フェミニズムによる自分の体のことを自分で決める権利リプロダクティブライツに対して、中絶は殺人であり、それを後悔することになる、そんなことを解放と呼んではいけないと。

緑のハンカチとニ・ウナ・メノスによる反フェミサイドの歌は、国境を越えている。グアテマラのレベッカ・ラネの「ニ・ウナ・メノス」は以前紹介したが、あまり知られていないところでは、ボリビアでも緑のハンカチをテーマにした曲が歌われている。ともに 2020 年の曲だが、リチャ・アランシビアの「緑のクエカ Cueca verde」、そしてラ・キメラの「緑のムルガ Murga verde」がそうだ。

クエカもムルガもそれぞれ伝統的なラテンアメリカの音楽ジャンル（リズム／踊り）のスタイルを指している。クエカはペルーでサマクエカという名前で生まれたものがボリビアに土着化したもので、チリ、ボリビアで 20 世紀初頭に大ブレイクした舞曲のスタイルだ。そしてムルガはアルゼンチンやウルグアイで時事ネタを歌う太鼓歌の一種として愛されているジャンルである。

こうした伝統的なスタイルにのせて、緑のハンカチを手し、女性の生きる苦しみ、差別への怒り、そして連帯から闘争への道筋が示されていく。それはラップからロック、ポップスから伝統的なスタイルまでを横断しながら展開されている。

同時に上に示したようにカウンターによる反撃もある。それらも含めて、ラテンアメリカで女性たちは、自らの尊厳を守るため、自分自身の人生を生きられない社会に NO を叫びながら、再び自らの人生の主人公であることを取り戻すための闘いを、闘っているのである。

メキシコ政府のスペイン国王「忌避」に思う

時は1974年。場所はメキシコ市中心街にあった外国メディア通信員協会。私は会員だった。ある夜、ブレンサ・ラティーナ（キューバ国営通信社）の記者が入ってきて、「諸君、スペイン政界の希望の星を連れてきた」と言い、その人物を紹介した。1879年発足の老舗、スペイン労働社会党（PSOE＝略称・社会党）の書記長に就任して間もない32歳のフェリーペ・ゴンサレスだった。私より1歳年長のこのアンダルシア人政治家は明朗快活で、人好きがした。私たちはフランシスコ・フランコ総統死後に来る民主化への同党の取り組みやラ米情勢を話し合った。

フランコは翌1975年死去、1977年に民主選挙が復活する。PSOEは1982年選挙で大勝し、ゴンサレスは首相に就任。その後の選挙に勝ち抜き1996年まで政権を率いた。「コロンブス米州到着500周年」の1992年の前年に来日したが、記者会見で私は「スペインは米州植民時代に、先住民虐殺、富の奪取など犯した悪行を詫びないのか」と質問した。「あれはスペインの歴史的偉業であり、詫びることなどありえない」。敢然と答えた首相は、17年前の墨都での私との邂逅を覚えていなかった。その後来日したホセ＝マリーア・アスナール（PP＝国民党）、ホセ＝ルイス・ロドリゲス＝サパテロ（PSOE）の両首相やガリシア州首相マヌエル・フラガ（PP 創党者、元フランコ側近）が私に返したのはゴンサレスと同じ答だった。

話を戻せばゴンサレスは、1992年の「コロンブス500年」記念行事として「セビージャ万博」、「第1回イベロアメリカ首脳会議」、「バルセローナ五輪」開催を決めていた。首脳会議はスペインの夢だった「イベロアメリカ諸国共同体」建設の象徴的出発点として重要窮まりない外交の祭典となるはずだった。イベロアメリカ（イベリア半島系米州）の多くを占めるイスパノアメリカ（スペイン系米州）との「東西冷戦終結後の新時代における関係強化」をスペインは強く望んでいた。

ところがカルロス・サリーナス墨大統領は強引に根回しして1991年にグアダハラハラ市で、その第1回首脳会議を開いてしまった。さすがに首都メキシコ市を開催地にしなかったが、フアン＝カルロス国王とゴンサレス首相はメキシコ、すなわちラ米側から見事な「歴史的しっぺ返し」を喰らわされたのだ。メ

キシコは翌年マドリーでの第2回会議を文字通り「二番煎じ」に貶め、「血・言語・宗教で繋がる旧植民地地域での存在拡大」を目論んでいた国王や首相をがっかりさせた。

前置きが長くなったが、メキシコは2024年10月1日のクラウディア・シェインバウム大統領の就任式にスペイン国王フェリーペ6世を招かず、政府首班ペドロ・サンチェス首相（PSOE）だけを招いた。国王は侮辱され、首相も出席を断った。この一件の根は浅くない。AMLO前墨大統領は任期中、コロンブス到着に始まる侵略、殺戮、収奪などを謝罪するよう同国王に求め、拒否されていた。AMLOの政治的申し子シェインバウムは師のスペインに対する歴史的姿勢を継承している。

バルセローナ五輪取材時、イベリア半島に2ヶ月滞在した私は「征服者たちの故郷」エストゥレマドゥーラ州を訪ねた。「メキシコ征服者」エルナン・コルテスの生地メデジンは人口3千の小さな集落だったが、その長四角の小さな中央広場で衝撃の光景に遭遇した。アステカ最後の皇帝クアウテモクとも受け止められる戦士の頭を左足で踏みつけ勝ち誇る鎧姿のコルテスの威圧的な銅像が建っていたのだ。台座には「メヒコ」とだけ記されている。正にメキシコを蹂躪した人物の「栄光」がグロテスクなまでに象られていた。AMLOはこの像を直接あるいは写真などで見たのではなかったか。見たとすれば激怒しただろう。私でさえ強烈な怒りと不快感を覚えたのだから。

州内の小さなグアダルーペ町には700年もの歴史ある豪壮な修道院がある。本尊の聖母マリーアは黒肌だ。クリスト＝バル＝コロン（コロンブス）、コルテス、「ペルー征服者」フランシスコ＝ピサロをはじめ多くの「征服者」は出航前にこの「黒い聖母」の前で航路の安穩を祈願した。コロンブスは出航と帰港の度に額づいていた。彼らはこの黒いマリーアを守護聖母にした。それが「褐色の聖母グアダルーペ」としてメキシコ市に出現したのはコロンブス米州到着から39年後の1531年だった。否応なしに混血させられた先住民族の魂を慰めるため、「グアダルーペの聖母」は重い役割を担わされた。AMLOは大統領として混血民族を代表し、「確執の500年」に一石を投じたのだ。

(1) ミレイ政権の先住民領域緊急法延長停止

アルゼンチンのミレイ政権は、国会通常会期終了後の12月10日、先住民共同体の土地調査と立ち退き停止を定めた「先住民領域緊急法」(政令 26.160)の延長を廃止するという必要緊急政令(DNU1083/2024)に署名した。二院制常設委員会は休会中も政令について討議できるが、政令が無効となるには両院での審議・否決が必要である。ミレイ政権の大型改革法のもとではその可能性は低く、フェルナンデス前大統領が3年前に延長に署名した先住民領域緊急法は2025年11月に終了することになる。

「先住民族が伝統的に占有してきた土地の共同体的所有権」を認める1994年の改正憲法第75条に基づき、先住民共同体が所有する領土を特定するための地籍調査を実施するために制定されたのが、2006年の「先住民領域緊急法」だった。その第3条で、地籍調査の任務は国立先住民問題研究所(INAI)に割り当てられていた。この18年間、公式に確認されている1,881の先住民共同体の47%で領域調査が実施されず、法律が廃止されると調査済みの53%の先住民共同体も不確実な状態に置かれる。

12月の必要緊急政令に先立つ9月末、INAIはメネム政権の1995年に創設された先住民共同体全国登録簿の廃止を宣告していた。国際人権委員会(IACHR)は、先住民共同体全国登録簿の廃止が、「先住民族の土地、領土、天然資源に対する権利の保護と自己決定権行使に影響を与える」と懸念を表明した。

この措置は、北西部のフワイ州、南部パタゴニアのリオ・ネグロやチュブット州などで先住民共同体の領域の承認が後退し、共同体の強制退去が行われていた時期に発表された。フワイ州に多く埋蔵されるリチウム、南部パタゴニアの森林資源などの開発を阻害する要因となっ



出典: Tierra Viva、2024年12月10日

てきた先住民共同体の存在を消し去ることが政令の目的であることは言うまでもない。

(2) ドキュメンタリー『水の時間』

聖なるアマゾン流域連合(La Alianza Cuencas Sagradas Amazónicas)は、居住領域を急速に蝕んでいる無秩序な採掘によって荒廃した森林を守るため、2023年にエクアドルとペルーにまたがるアマゾン川上流域に居住する約30の先住民族を結集して組織化された。

アマゾン流域は未曾有の森林火災でブラジルだけでも2024年1~9月に2,240万ヘクタール以上が焼失している。大量の煙で日射が遮られ、蒸発プロセスに多大な影響を及ぼし、猛暑と干ばつに曝されている。主要な移動経路となってきた河川水位は史上最低レベルに落ち込み、ペルー・ロレト県で最大のムサ・カルシャ潟(79km²、宍道湖の面積)も干上がっている。

ロレト県とアマソナス県境域にあるポンゴ・デ・マンセリチェ峡谷への巨大ダム建設計画は住民の反対で阻止されている。しかしロレト県のマラニョン川中流域やイキトスでアマゾン本流に合流するナナイ川一帯では無認可浚渫船による金違法採掘が展開している。

聖なるアマゾン流域連合は、気候変動の緩和と適応に重点を置く活動を展開するとともに、アマゾンの森林破壊に抵抗する若い世代の養成にも力を入れてきている。

Democracia Abierta から提供された約18分のドキュメンタリー『水の時間(El tiempo del agua)』(<https://www.youtube.com/watch?v=xJy9asJ0bGo>)

では、ペルーのタラパトで開催された連合の総会にカヌーで赴いたヒバロ系先住民族の指導者二人の語りを通じて、先住民の文化遺産と地域の環境を守ろうとする姿勢が描かれている。

一人はエクアドルの先住民族アチュアの指導者ユンカル・ドミンゴ・ペアス、もう一人はペルーの先住民族ワンピスの指導者ウライス・ペレス・ラミレスである。この二人の口からは、マラニョン川上流域に居住している先住民の共同体は気候変動が自然環境に及ぼす壊滅的な影響に危機感を抱いていることや、水、森林など自然は生きている霊的な存在と認識されていることが語られる。

出典: Democracia Abierta、2024年12月16日

(3) 養豚業の水質汚染と略奪へのマヤの抵抗

養豚業がユカタン州で深刻な公害をまき散らすようになるのに 20 年しかかからなかった。1994 年の NAFTA 発足で豚肉切落し肉の輸出に米国市場が開放され、ケケン社を所有するグループ・ボルシコーラ・メヒカーノ (GPM) など有力企業は巨大養豚場をメキシコ中西部からユカタン半島に移行させた。2003 年に米国がユカタン州を豚熱、豚コレラの非汚染地域とし食肉輸出を自由化したため、GPM は過去 15 年間で州内に約 800 の巨大養豚場を設立した。

豚への水供給、繁殖、肥育、加工施設の清掃のために大量の水を使用する養豚業にとり水は不可欠な投入資源である。8 万頭以上を肥育する巨大養豚場の大半はセノーテ地帯にある先住民マヤの共同体の周辺に立地する。約 800 の養豚場の 9 割以上が環境許可を持たず、先住民との事前協議も実施されていない。州都メリダの西のキンチルでは森林の 8 割が伐採され、2023 年 3 月の調査で排泄物による窒素やリンで水源が汚染されていることが確認された。

国家権力は反対運動を弾圧するため警察組織を利用している。2013 年 6 月、キンチルではケケン社が養蜂家や農家が所有するカントウクンの土地 30ha を不法占拠し、2023 年 2 月、州都の東のシティルペチの巨大養豚場への反対運動は厳しく弾圧された。先住民側の抵抗活動も盛んで、キンチルの農民はカントウクンでの土地占拠に関しケケン社を告訴している。2023 年 9 月末、州都郊外のサンタ・マリア・チではロレ・デ・モラ家所有の養豚場の操業一時停止命令を獲得し、完全閉鎖を求めている。州都の南のホムンでは、巨大養豚場の環境影響許可が取り消され、2024 年 4 月には排水許可も取り消され操業不能となっている。

ユカタン州の巨大養豚場が享受してきた優遇措置に対する先住民共同体の抵抗は、環境破壊と社会的権利や自由の蹂躪と闘う領土防衛



養豚場から排出される汚染水

の大きな砦となるとともに、生態系存続と食料主権は先住民の歴史的な闘いのなかで採掘主義を生き抜くうえで有力な支柱となっている。

出典: La Jornada Ecológica 284

(4) ピウラ溪谷高原部の鉱山開発計画

ペルー最北部のピウラ県では、エル・アルガロボとリオ・ブランコという二つの鉱山開発計画に対する反対運動が現在も展開している。ボルアルテ政権は 12 月末にタンボグランデ地区のエル・アルガロボ鉱山開発計画をブエナベンチュラ・マイニング社に 2 億 753 万米ドルで発注した。この計画は 2002 年の協議で住民の 98% 以上が反対したタンボグランデ鉱山開発計画の一部である。地域の農業協同組合やタンボグランデ地域開発委員会は、マンゴーの国内第一の産地、レモンの国内第二の産地である流域の農家の経済的貢献を強調し、地域開発防衛連盟は農畜業を基盤とした開発モデルを選択し鉱山開発は採算が合わないとは拒否してきた。

エクアドル国境に近いピウラ州北東部のキロス川とチンチペ川の源流域は家族経営の農業や都市・農村住民の生活を支える水を供給してきた。20 年以上前に浮上した銅とモリブデンの露天掘り採掘を目指すリオ・ブランコ鉱山開発計画に対する 2007 年 9 月の協議で 95% の住民は拒否を表明していた。当初は英国モンテリコ・メタルズ社、2007 年以降は中国のリオ・ブランコ社（紫金鉱業集団系列）の暴力的弾圧が始まり、現在まで 10 人が殺害され多くの指導者が犯罪者扱いされてきた。「ピウラ県の領域、パラモス、雲霧林の防衛と保護」と題する報告書は、ピウラ県の農業部門はリオ・ブランコ鉱山開発で予測される利益の 27 倍の価値を生み出し、農業は鉱山開発計画の 46 倍の雇用を生み出すとしている。

アヤバカとワンカバンカ地区の農民ロンダや共同体は水と領域の防衛の継続を宣言したが、採掘事業の政治的圧力は止まらない。2023 年、鉱山会社はピウラ県とワンカバンカ行政区の支持を得たと発表した。両自治体は否定した。ペルー政府は、地域住民の意見を無視、企業利益のみを最優先し、アレキパ県のタンボ



2025 年 1 月 30 日の抗議行動

出典: Red Muqui - Blog 2025 年 1 月 13 日

溪谷のティア・マリア鉱山開発計画で採用してきた方式をピウラ県においても繰り返そうとしている。

編集後記

2024 年 11 月に発行予定のソマリサ 190 号は、11 月半ばの段階で原稿を十分に確保できなかったため、2025 年 2 月刊行分と合併して発行することになりました。

トランプ第 2 次政権発足でどんな変動が起きるかは不明だが、ミレイ大統領のアルゼンチンの動向にその方向性を窺わせるものがある。ミレイはパリ協定離脱や世界保健機関脱退を早々に表明したが、トランプ就任以前から、多様性 (diversidad) や脆弱性 (vulnerabilidad) を無視する極端な自由至上主義 (リバタリアニズム) は、様々な場で表明されていた。2024 年 11 月の先住民の権利保護に関する国連勧告案に関しては「先祖伝来の知識の尊重は女性や子供の権利を侵害し、科学の進歩に反する」と唯一反対していた。2024 年 12 月の G20 では、偽情報対策の推進に対しては「SNS での表現の自由制限」と反対し、超富裕層への課税強化や男女平等促進に関しても反対していた。2025 年 1 月下旬のダボス会議でも、「平等の原則」に反するとして「女性殺害」を刑法から削除すると発言している。

小林 致広

今回の印刷作業は東京で、2025 年 5 月 10 日 (土)

発送作業は関西で、2025 年 5 月 17 日 (土) の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 189 メキシコ初の女性大統領誕生の陰で	Vol. 186 2023 年エクアドル大統領選挙、その混乱の中で
Vol. 188 日本からラテンアメリカに広がる「障害者革命」	Vol. 185 コロンビア左派政権樹立から 1 年、終わらない戦争
Vol. 187 蜂起から 30 年、サパティスタ運動の現在	

メーリングリスト

レコムに入会 (もしくは購読) すると、メーリングリストにも無料で参加できます
メールアドレス、自己紹介を添えて、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください
メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています

会員の種類

- ☆会 員 : 年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員 : 年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員 : 年 10,000 円 (一口) 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員 : 年 4,000 円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先 〒678-0001 兵庫県相生市山手 2-502-1 大西方 お問い合わせは、郵便、もしくは e-mail で お願いします。 ホームページ : http://www.jca.apc.org/recom https://recom.r-lab.info e-mail : recom@jca.apc.org Facebook : https://www.facebook.com/recomsonrisa/	郵便振替口座 : 00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク レコム口座 162 万 7959 円 グアテマラ基金口座 27 万 4359 円 (2025 年 2 月現在) そんりさ (SONRISA) 190 号 2025 年 2 月 15 日発行 日本ラテンアメリカ協力 ネットワーク (RECOM) 定価 400 円
--	---